# ニュージーランドと日本の体育・スポーツにおける類似点と相違点

武　藤　幸　男

# The Study on Similarities and Differences in Physical Education and Sport between Japan and New Zealand.

Yukio MUTOH

Abstract

The present study designed to investigate similarities and differences in physical education and sport between Japan and New Zealand. They are both island countries and their sosieties had been isolated other societies. By comparing both cultures from the aspect of history of physical education and sport, this study was aimed to find out the characteristics of the insularity in physical education and sport and how they were different from those of continental countrise and consider the current problems of them in the intrenational society.

## 概　要

我が国とニュージーランド（以下NZ）の地理的・自然環境が島国であるという共通点がある。

そこで，何か離島文化の特色とでも云うものが体育・スポーツのなかにもあるのではなかろうか，そして其のなかに大陸では見られない特色をみい出すことが，出来るのではないかという素朴な疑問と現状の世界的な傾向としての国際化という事象を踏まえて，比較体育的・体育史的な立場から考察をしてみることにした。

## はじめに

ここ数年，NZの体育について研究を進めてきたが，体育学会（昭和61年度）において指摘されたように，「両国間に多くの共通点が見られるのではないか」の質問については，もっともなことで，NZの研究を進める以前に今回のテーマを予測して取りかかったわけで，特に離島の体育の特色というような研究を前提に何か括れるものがあるのではないか，内容としては文化の伝播の特色を体育的見地から身体教育的に生かし得るような事象はないか，ということを模索することがかねてからの念願であった。そこで此の度は，先に述べたように比較体育的・体育史的立場から我が国の体育・スポーツを眺めてみることも含めて両国の考察をしてみることにしたわけである。そこで先ず論をすすめていくうえで都合のよい年表を作ることからはじめてみた。何分にもNZの場合資料入手が思うようでなかったので，年表ずくりもたどたどしいものとならざるをえなかった。

1　NZの体育・スポーツ・教育等を中心とした年表，

1642年　NZ発見
1769年　ジェームズ・クック上陸
1814年　キリスト教布教
　　植民地化始まる
1840年　マオリ族とワイタンギ条約結ぶ
1845年　第一次マオリ戦争
1848年　第一次マオリ戦争終結
1853年　自治権を定めた憲法が与えられ自治領となる（1907年迄）
1860年　第二次マオリ戦争
1869年　オタゴ大学設立
1870年　第二次マオリ戦争終結
1873年　カンタベリー大学設立
1877年　軍事教練の実施
1879年　文部省主導でマオリ族の教育
1882年　オークランド大学設立
1889年　選挙法の制定
1893年　婦人参政権が認められる
1893年　首相セットン社会立法を制定
1897年　ウエリントン・ビクトリア大学設立
1909年　イギリスの指導要領に基づく補充コースの実施
1913年　体育部長，文部省によって任用される
1913年　労働党と社会民主党の連合内閣成立
1917年　衛生学校の医者が体育指導にあたる
1920年　政府により主任指導官任命
1928年　体育指導要領の作成
1933年　学校体育指導要領普及
1939年　学校体育指導要領の改定
1945年　オタゴ大学に体育学部を置く
1948年　体育学の学位設立
1951年　アメリカ・オーストラリアとアンザス条約を結ぶ
1960年　3年制の小学校教員課程プラン作成
1964年　体育館建設用の政府補助金2倍増とする
1968年　マオリの学校管理は地方教育委員会に委任
1976年　体育関係学会誌出版
1986年　体育関係行政誌発行　1)

年表でもわかるように，NZの場合，約350年程度の歴史（それ以前は，ポリネシアから，渡島してきたといわれる人々が生活していた）と史実上ではなっているなかで，今日の体育・スポーツ界をながめてみるに，実に素晴らしいものがいくつか光ってみえる種目がある。それらは，世界的に通用するものを持っているということであり，それが現在，人口でも，320万人程度でありながら基礎体力型といえるラグビー，持久力型ともいえるマラソン・クロスカントリーにおいてのテクニックと，メカニズムの戦いとも言われるヨットという具合に，導入してくれた国を追い越すまでに，いかにして成長してきたか，実に興味のあるところである。現在のところ，これらの解明については，精神的（心理的）なものがかなり影響しているといわれている。それは母国であるイギリスに追いつけ，追い越せというNZの人々特有なイズムにあるといえよう，一方ではシステム化された訓練・指導・組織（団体）が年を経る毎に成果へと結び付けてきた結果とも捕らえられ，この両面から現在のような状況を生み出したものといえよう。ここで再び年表にもどって，NZが発見された頃，日本においては，宮本武蔵の『五輪の書』が世に出た頃であり，そして後の話題となるラグビーの発祥の地である。ラグビー校（1567・イギリス）は，NZ発見以前に創立されていたことになる。そして1800年代になって新時代を迎えたといっても過言ではなかろう，この頃は日本においては，藩を中心に，武芸所・射場（洋式訓練場）などが造られ，ヨーロッパにおいてはドイツのヤーンやスウェーデンのリングなどが功績を上げた頃である。

こうして現地人と条約を結んだ頃は，母国

イギリスにおいては『ルーラル・スポーツ辞典』，スウェーデンでは，リングの『体育の一般的原理』が刊行された頃であった。

其の後の歴史的事実としてのマオリ族との戦争は，軍事的な背景をもったものとはいえ集団活動としての軍事訓練が発展の兆しを見せてきたであろうことが予測される。これらは基礎体力の強化であり，自主性や自発性を高く評価するのでなく，命令や号令にしたがう，そして，その目的行動に耐えることであり，これらに耐えることのできる体力を要求されるわけであるが，目的とその能力と機能を一般生活に生かすとすれば大変意義のある心身の活動であったといえよう。このことは，当時の生活においては，まだまだ体が資本的な面が多かったわけで，上記のようなことがいえるであろう，NZにおいては，このような対立関係にある緊張感が，島という環境のなかで，持続されるわけで，このことが双方(マオリ族と移民）の戦いに対する潜在的な力の増強を計ることになり，現在の運動文化の結実のもとともいえる。また，世界に通用する，いくつかのスポーツを生み出す遠因の一つとなったといえよう。このように国としての成り立ちは，遅いのであるが，1853年自治領となり，それまでの移民の多くは，高い文化の国からの人々であったわけで，其の後の急速な一国家としての文化の発展に著しいものがあってもおかしくないのであるが，その発展段階のなかに，島国的なところと指摘できる事象がなかったか，歴史を追いながら再検討していきたい。

このあと，1860年には，第二次マオリ戦争が，起こるわけであるが，これに伴なう人々の集団訓練がポジティブにできるようになったともいえ，使用するもの，利用する器機によっての身体機能訓練の進歩が，当然あったであろうことが，予測されるのである。そうかといって，骨肉の争いとスポーツのゲーム性をオーバーラップさせると恐ろしい現実となってしまうのであるが(闘争本能)，この辺のところは，かなりの含みを持っているということができよう。この頃，(1869・1870年）オタゴ・カンタベリー等の大学が設立されるのであるが，くしくも，現在身体活動教育のメッカは，オタゴ大学なのである。この頃の我が国の状況はというと沼津兵学校で初めて身体検査を実施したり，藩校で遊泳科を設けたり，天皇の連隊訓練閲見などがあった。一方，諸外国では，オックスフォード大学とハーバード大学における漕艇レースが行なわれたり，イギリスにホッケー連盟ができたり，イタリア体育協会ができたりして，見方によっては，揺籃期を脱していたともいえよう。

年表にもあるように，1877年，軍事訓練の実施がうたわれているが，これは，ある意味で従来の訓練の集約と同時に威嚇の意味をも感じさせるものと思える。そしてマオリ族に対しては，公的機関主導でその教育に当たり，一国としての統一と統率をねらったものといえよう。

1800年の後半には，大学の設立・選挙法の制定・婦人参政権・首相セットンによる社会立法の制定，そして，独立した頃，教育に関しては，イギリスの指導要領に基づく補充コースを設けている。

1913年には，我が国の文部省に相当する機関によって体育部長が任命されている。

やがて，1917年には，衛生学校の医者が，体育の指導者となっている。

1928年に体育の指導要領が作成されるやその普及と改良が盛んになされ，1945年のオタゴ大学の体育学部の設立へとつながっていき学位の設定へとつながっていくわけである。

そして，アンザス条約（1951年）をアメリカ・オーストラリアと結ぶことによってその交流を文化面でも行なうことにより国としての繁栄が見られるように，当然のことの様に展開されるのである。

1960年に入るや一段と教育・体育が盛んに

なり教員養成過程の検討や体育館設立に関しては，助成金が国から支給されるようになった（第2次世界大戦後の日本と類似），そして，マオリ族への配慮はこの時代にも行なわれていたのである。

やがて，1976年になると，体育関係学会誌の出版が成されるわけであるが，この辺のところは，出版技術や紙の製造などの技術にも問題があったことを学会誌の冒頭で述べている。

こうして，1986年にようやく体育行政に関する小冊子が出版されるのである。

ここでは，既に部分的には行なってきたが1960年頃からの動向を，我が国や諸外国の体育・スポーツと比較しながら何か特有なものが見出せればと思い，考察を加えていきたいと思い，観点を少々変えてみた。

そこで，移入性・伝播性等と同時に，外国への移出性・波及性についても眼を向けていきたいということで，移入の面では，NZにおいては，1970年代迄は殆どがイギリスからのものが多く，1976年の学会誌でのピアソンらの論文をみてもそのことは云えるのであるが，そのなかでピアソンは，身体運動・体育・スポーツ・レクリエーション等の最終到達点（目的）を，オリンピックに，置いているということに注目したい。ここでもう少々NZについてまとめてから我が国との比較を再度行なうことによって，離島性的なものを導き出していきたい。先にも上げた，1976年の初の体育系の学会誌ともいえる「The Nature and Meaning of Sport in New Zealand」のなかでのアレン（D. J. Allen）[9-6]の「Be a sport」やピアソン（Kent Pearson）[9-1]による。「Meanings and Motivation in Sport）[9-1]のなかでNZのスポーツは，あくまでもイギリスから渡ってきたもので，また，スポーツそのものは，イギリスで発生したもので，ギリシャやローマで云々ということは全く考えていない。こうした概念と論拠でスポーツを考え，そして，次のような本質と意義のもとに，規制を計ろうとしているかのようにおしすすめられていることこそ，この時代までのNZのスポーツを考えるとき離島（一国至上）という条件を無視することはできないのではないかと思われる。

この本質と意義とは，ジョーン・ヒンクリフ（John Hinchliff 1987）[9-3]は，次のように述べている。『スポーツは，オートメーションや組合の労働短縮の協定や，レジャー産業の賜物ではない。また，電子技術に保障されたものでもない。それは背景の変化と混同されるべきものではない。……スポーツとは，むしろ積極的な生命との契約であり，自由の表現であり，文字どうり生命の表現と祝福である』。

これにたいして，ミルス（Mills 1959）[9-1]は，『社会におけるスポーツは，社会の本質の自覚や，社会で主流になっている文化的価値観なども含んでいる』と強調している。スポーツの本質は，不変的ではあるが，その副次的文化としての価値ずけや，人々の動機ずけは，社会の変遷に大きく，影響されるのである。上記のような考えのなかにNZにおけるスポーツの存在は，次のように，まとめることができると思われる。それは，やはりイギリスを発生の地とし，イギリスで考えられている体育・スポーツの思想が，やはり根底となっていることを，否定することは，1980年初頭まではできなかったであろうし，それ以後の多次元的社会・文化交流のなかにおいて，アメリカの影響を大きく受けるのであるが，その根底には，概念としてのイギリスイズムを取り払ってしまうことはできないであろう。そのイギリスの体育・スポーツの意図するところは，チームゲームが主体となっており，紳士の伝統を重んずる点で，古代ローマのものとは，全く異なり，マレア（Malea 1972）[9-1]によれば，

1．紳士の伝統

2．ヒューマニズム（人間性重視）

3．雄々しさの伝統

という3つの価値観に分類される。マレアの言うヒューマニズムとは，バランスのとれた，徳性・知性・肉体の発達を重視するものであり，雄々しさとは勇気の質や忍耐，忠誠心，協力とパートナーシップを指し，紳士の伝統とは，身体の武勇，他者との公正さ，勝利のなかの謙遜，敗北のなかの快活や栄光を指すとしているが，このようなスポーツ精神とも言われるような本質的なものがそのままNZのなかに抵抗無く持ち込まれたのではなく，当時のNZ社会が発展途上国であったため，スポーツの価値観に労働の価値観が結びつけられて調和していったことをピアソンは指摘している。そしてピアソンは労働の価値によってもたらされたものとして次の3点を上げている。

1．身体的武勇の強化

2．スポーツゲームのより一層の組織化と競争化

3．スポーツが，より一層，技術的，商業的になった

の3点である。

この三者とも根底とする理念は同じであって，それは，イギリスの体育・スポーツを中心に考えたうえで，現状のNZの体育・スポーツを分析し，展開と同時に将来のNZの姿を予測し，その方向へ導くための論理構成をうたいあげているように思える。いずれにせよNZの立場からすると，渡来文化の範ちゅうに入るもので，この現象は，20世紀初頭までとは，少々勝手の違うものであった。それは，教育制度的に一緒に移入されたなかにあったもので，前記の年表のように，1900年代初頭，具体的には，1913年の文部省による体育部長の任命にあるということになるが，まさに「文化のもとには思想がある。」といわれるが，NZの場合も正に其の通りにあてはまる体育活動が展開されたといえよう。これまでに羅列してきた年代の変転とともに，NZの体育・スポーツは，現在の国際化の波に乗って一層の進歩と変遷を多次元文化による社会構成の見本のような状況にあるようである。

さて，一方，日本の場合は，というと次のような年代的変遷をたどるわけであるが，この場合史実の年代の年次羅列は，日本の体育史ではなく，客観的に史実をとらえることのできると思われる外国人のまとめた体育史として，D. B. ヴァンダーレン・B. L. ベネットの共著による「体育の世界史」の見地を利用し，本研究のまとめへと近づけていきたい。

日本の場合，他国からの文化を，より多く，また，よりよく吸収し，初めは，現在の中国のものであった。それらと自国のものをうまくミックスして，約10世紀に渡って取り入れたものを柔道，剣道，蹴鞠，流鏑馬，等，古代・中世のスポーツに，生かしている。そして中世の武士道と結び付いたスポーツへと別れていくと同時に近世への足掛りとしている。しかし，その間，鎖国などの政策や幕府の安泰のための行政は，かなり活動を制限したり，階級制度によりセーブをさせたり，形成，華美といった形での体育・スポーツとしてのものであったが，1868年の明治に入るや，躍進的な時代がスタートするのである。そして，1872年には体育は，学校教育のなかで必修科目となった。(NZの場合の1937年と同程度のものが発効したものと推測される)

1878年　体操伝習所ができる

1913年　スウェーデン体操が紹介される

(NZでは，1909年にイギリスより紹介されている)

1928年　衛生に関しては，体育に吸収される

(NZの場合は，1917年に衛生指導者が体育を指導する制度が実施された)

1931年　一層軍国主義的傾向，強くなる

1941年　体操科は，体錬科と変わる

1947年　民主的，科学的な原則に基づいて指

導要領が改定された。そして体育科となる
同時に大学に体育を必修とした
1947年　レクリエーション協会設立
社会体育振興のための組織ができる

尚，少々追補してみると，20世紀初頭には，バスケットボール・バレーボール・集団ゲームが紹介された。このように，19世紀を変り目として，海外よりの体育文化の移入がなされるようになったともいえる。

1926年，1936年，1941年，と要目の改定をしているが，この根底には，アメリカナイズされたものが多いが，結果として，軍国主義的風潮（1926年～1935年）があったとされている。これも1926年，軍事教錬教授要項が作成されているところからも，このようなことがいわれる所以であると思われる。

いずれにせよ客観的にみた日本の体育史の内容で，自国意識をもって，細かく当たってみても訂正の余地はないが，内容としては貧弱であることは免れられない，後述のなかに上記年代や内容について，部分的には本研究のまとめに必要な部分は他の資料をも参考におしすすめていきたい。

## まとめ

上記のような考察をした結果，次のような類似点を上げることができる。

1．自然環境が似ている。
2．互いに自国のものでなく移入された体育・スポーツが主軸となっている。
3．国内において，特有なスポーツを生み出している。
　日本　軟式(テニス・野球・卓球)等
　NZ　NZラグビー，スティックゲーム等
4．上記のものは，海外への影響力をもった。
5．ともに19世紀になって其の内容，外観に充実が見られるきざしを見せている。
6．特に過去20年位が，他国の影響が強くなっている。
7．従来は，交流に色々な意味での制限があった。
8．時流の意味での国際化は，ともに数年前からといえよう。
9．両国ともに持久力型スポーツにちかいものが互いに強かった。
10．少数支配の原理により，統一組織が作られていった。これらの過程のなかで体育・スポーツも育まれた。(これらは，体育・スポーツの指導，運営には好都合といえよう)。
11．ともに移入文化（体育・スポーツ等）の吸収力がともに優れていて，しかもそれが短期間であった。
12．体育の面で見ても。
　1．Military drill
　2．Physical training
　3．Physical education
　4．Sport and recrieition
　この順序も同じ様な経路で現在に至っている。

一方，相違点についてあげてみると。

1．NZは，衛生学校を修めた者が体育を指導していたのが始めで，「始めに保健ありき」であった。
2．20世紀までは，殆どNZは，他国からの影響は，イギリスのみか，イギリスをとうしてであった。(体育もスポーツも)
3．NZの場合は，スポーツの頂点をオリンピックに置いているが，日本の場合は，必ずしもそうではない。
4．複合民族(日本)，狩猟民族＋白人(NZ)なりの種目の内容，種類に違いがある。
5．日本では，野球が盛んであるが，NZでは，クリケットが盛んで野球については殆ど普及していない。

6．NZは，バックグランドは，イギリスであり，日本のバックグランドは，アメリカであるといえよう。と同時にイデオロギーの違い。

7．経済大国といわれるようになった日本の場合，他国との接点が多くなり，技術情報が多く入ってくる様になった。また，ハイテクにより関係器機備品，服装等の進歩がかなりあった。

8．両国の世界的に通用する種目数の違いがある。

9．伝統的に強いものとなると，日本は，NZほどではない。

以上両国を比較し相違点と類似点を上げてみたが，本研究をとうして，島国性・離島性というようなものが類似性のなかにもっと強く出てくることを期待したのであるが，島の単位がもう少々小さければ，例えば，八丈の鬼太鼓や沖縄の空手のように，護身・戦闘のためのものが生み出されるような事態があってもと思ったのであるが，予測したほどでなく，兆しとして捕らえる程度ならば，NZの〝Poi〟ダンス，Taku Paty，スティックゲームなどが上げられるが，いずれにせよ離島性といえるかどうか，NZの場合のように偏った文化の伝播が19世紀まではあったということができる程度ということになる。

結論として，「離島性」とか，「島国根性」というようなものは，現代の国際化の波のなかでは，存在し得ない事象で，筆者としては，未だ見落としているものもあろうが，現在のところ，歴史の過程のなかに，何となく概念づけられたものを追ってきたような結果となった。

**参考文献**


1）D.B.ヴァンダーレン＆B. L. ベネット共著　World history of physical education. ベースボール・マガジン社

2）P・C・マッキントッシュ　Physical education ENGLAND Since 1800. ベースボール・マガジン社

3）加藤仁平，他　新日本教育史　協同出版

4）岸野雄三，体育史　大修館書店

5）岸野雄三，他　近代体育スポーツ年表　大修館書店

6）川村英男，他　日本体育史　逍遥書院

7）ヒュー・コータッツィ　東の島国，西の島国　中央公論社

8）日本体育協会監修　スポーツ大辞典　大修館書店

9）John Hinchcliff. The nature and meaning of sport in New Zealand. Published by the centre for continuing education the Universty of Auckland.

9-1 Kent Pearson. Meaning and motivation in sport.

9-2 P. C. Mclntosh. Fair play: Does it have a future?

9-3 Jhon Hinchcliff. Some Philosophical. Moral and theological assumptions about sport.

9-6 D. J. Allen. Be a sport.

10) Alen Armstrong. Games and dances of the Maori people. Viking sevenseas Limited.

11) E. C. Keating. Games and dances of the Maori a guide book for teachers. Government printer. Wellington, NZ.